

# 木精（三尺角拾遺）

泉鏡花

青空文庫



「あなた、冷えやしませんか。」

お柳は暗夜りゆうやみの中に悄しよんぼり然と立って、池に臨のぞんで、その肩を並べたのである。工学士は、井桁いげたに組んだ材木の下なる端はしへ、窮きゆう屈くつに腰を懸かけたが、口元に近ちかぢか々と吸つた巻煙草まきたばこが燃えて、その若々しい横顔と帽子の鍰つばびろ広な裏とを照らした。

お柳は男の背せなに手をのせて、弱いものいいながら遠慮えんりよげ気なく、「あら、しつとりしてるわ、夜露よつゆが酷ひどいんだよ。直じかにそんなものに腰を掛けて、あなた冷つめたいでしよう。真ほんとに養生ようじようぶか深い方かたが、それに御病氣あげく拳句けんくだというし、悪いわねえ。」

と言つて、そつと圧おさえるようにして、

「何ともありはしませんか、又またぶり返すと不可いけませんわ、金きんさん」

それでも、ものをいわなかった。

「真まとに毒ですよ、冷えると悪いから立たつていらつしやい、立たつていらつしやいよ。その方が増ましですよ。」

といいかけて、あどけない声で幽かすかに笑わらった。

「ほほほほ、遠とこい処ころを引張ひっぱつて来て、草くた臥たれたでしよう。濟すみませんねえ。あなたも厭いやだというし、それに私わたしも、そりや様子を知しつて居いて、一いっしよ所に苦勞くろうをして呉くれたからツたつても、姉あねさんには極きまりが悪わるくツて、内うちへお連れ申ますわけには行ゆかないしさ。我わが儘ままばかり、お寝よつて在いらつしやつたのを、こんな処ところまで連れて来て

置いて、坐すわつてお休みなさることさえ出来ないんだよ。」

お柳はいいかけて涙ぐんだようだったが、しばらくすると、

「さあ、これでもお敷きなさい、些少ちつとはたしになりますよ。さあ

、

擦すりよ寄けはいつた氣勢けはいである。

「袖か、」

「お厭いや？」

「そんな事を、しなくツても可いい。」

「可よかありませんよ、冷えるもの。」

「可いいよ。」

「あれ、情じょうこわが強いねえ、さあ、ええ、ま、瘦やせてる癖くせに。」と向むこ

うへ突いた、男の身が浮いた下へ、片袖を敷かせると、まくれた  
白い腕を、膝ひざに縋すがつて、お柳は吻ほっと呼吸いき。

男はじつとして動かず、二人ともしばらく黙然だんまり。

やがてお柳の手がしなやかに曲まがつて、男の手に触ふれると、胸の  
あたりに持つて居た巻煙草は、心するともなく、放はなれて、婦人おんなに  
渡わたつた。

「もう私は死ぬ処ところだったの。又笑うでしょうけれども、七日ばかり  
何にも塩しおツ氣けのものは頂たかかないんですもの、斯こうやってお目に  
懸かりたいと思つて、煙草も断たつて居たんですよ。何だつて一旦いったん  
汚けした身体からだですから、そりやおつしやらないでも、私の方で氣が  
怯ひけます。それにあなたも旧もとと違つて、今のような御身分おみぶんでしよ

う、所詮<sup>しよせん</sup>叶<sup>かな</sup>わないと断<sup>あきら</sup>めても、断<sup>あきら</sup>められないもんですから、あなただ笑<sup>あは</sup>つちや厭<sup>いと</sup>ですよ。」

といい淀<sup>よど</sup>んで一寸<sup>ちよつと</sup>男<sup>おとこ</sup>の顔<sup>かほ</sup>。

「断<sup>あきら</sup>めのつくように、断<sup>あきら</sup>めさして下さいッて、お願い申<sup>ま</sup>した、あの、お返<sup>へ</sup>事を、夜<sup>よ</sup>の目<sup>め</sup>も寝<sup>ね</sup>ないで待<sup>まち</sup>ッてますと、前<sup>まへ</sup>刻<sup>さつき</sup>下<sup>くだ</sup>すつたのが、あれ……ね。

深<sup>ふか</sup>川<sup>がわ</sup>のこの木<sup>き</sup>場<sup>ば</sup>の材<sup>ま</sup>木<sup>ぎ</sup>に葉<sup>は</sup>が繁<sup>さか</sup>つたら、夫<sup>いっしよ</sup>婦<sup>しよ</sup>になつて遣<sup>や</sup>るッておっしやつたのね。何<sup>ど</sup>うしたつて出来<sup>でき</sup>そうもないことが出来<sup>でき</sup>たのは、私の念<sup>ねん</sup>が届<sup>とど</sup>いたんですよ。あなた、こんな<sup>くら</sup>いに思<sup>おも</sup>うもの、その位<sup>くらい</sup>なことはありますよ。」

と猶<sup>なほ</sup>しめやかに、

「ですから、最<sup>も</sup>う大威張<sup>おおいばり</sup>。それでなくツてはお声だつて聞くことの出出来ないのが、押懸<sup>おしか</sup>けて行つて、無理にその材木に葉の繁つた処をお目に懸けようと思つて連出<sup>つれだ</sup>して来たんです。

あなた分つたでしょう、今あの木挽小屋<sup>こびきごや</sup>の前を通つて見たでしょう。疑うもんじやありませんよ。人の思<sup>おも</sup>いですわ、真暗<sup>まつくら</sup>だから分らないつてお疑<sup>うたぐ</sup>んなさるのは、そりや、あなたが邪慳<sup>じゃけん</sup>だから、邪慳<sup>かた</sup>な方にや分りません。」

又黙つて俯向<sup>うつむ</sup>いた、しばらくすると顔を上げて斜めに巻煙草を差寄<sup>さしよ</sup>せて、

「あい。」

「……………」



「さあ、」

「……………」

「邪慳だねえ。」

「……………」

「ええ！、要らなきや止せ。」

というが疾いか、ケンドンに投げ出した、巻煙草の火は、ツツと楕円形に長く中空に流星の如き尾を引いたが、※と火花が散って、蒼くして黒き水の上へ乱れて落ちた。

屹と見て、

「お柳、」

「え、」

「およそ世の中にお前位なことを、私にするものはない。」

と重々しく且つ沈んだ調子で、男は肅然としていった。

「女房ですから、」

と立派に言い放ち、お柳は忽ち震いつくように、岸破と男の膝に頬をつけたが、消入りそうな風采で、

「そして同年紀だもの。」

男はその頸を抱こうとしたが、フト目を反らす水の面、一点の火は未だ消えないで残って居たので。驚いて、じつと見れば、お

柳が投げた巻煙草のそれではなく、靄か、霧か、朦朧とした、

灰色の溜池に、色も稍濃く、筏が見えて、天窗の円い小な形が

ひとつづつ蹲んで居たが、煙管を啣えたらうと思われる、火の光

が、ぽツちり。

又水の上を歩行あるいて来たものがある。が船に居るでもなく、裾すそが水について居るでもない。脊高せたかく、霧おんねぎみと同鼠の薄こころもい法衣ころものようなものまとを絡むつて、向むこうの岸からひらひらと。

見る間に水を離れて、すれ違つて、背後うしろなる木納屋きなやに立てかけた数百本の材木の中に消えた、トタンに認めたのは、緑ろくしやう 青あおで塗つたような面おもて、目の光る、口の尖とがつた、手足は枯木のような異人であつた。

「お柳。」と呼ぼうとしたけれども、工学士は余りのことに声が出ひとみなくツて瞳すを据えた。

爾そのとき時何事とも知れずほの仄ほのかにあかりがさし、池を隔へてた、堤防どて

の上の、松と松との間に、すつと立ったのが婦人の形、ト思うと細長い手を出し、此方の岸を気だるげに指招く。

学士が堪まりかねて立とうとする足許に、船が横ざまに、ひたとついて居た、爪先の乗るほどの処にあつたのを、霧が深い所為で知らなかつたのであろう、単そればかりでない。

船の胴の室に嬰兒が一人、黄色い裏をつけた、紅の四ツ身を着たのが迂つて、彼の婦人の招くにつれて、船ごと引きつけらるるように、水の上をするすると斜めに行く。

その道筋に、夥しく沈めたる材木は、恰も手を以て掻き退ける如くに、算を乱して颯と左右に分れたのである。

それが向う岸へ着いたと思うと、四辺また濛々、空の色が少

し赤味を帯びて、殊ことに黒ずんだ水面に、五六人の氣勢けはいがする、囁ささやくのが聞きえた。

「お柳、」と思わず抱占だきしめた時は、浅黄あさぎの手絡てがらと、雪なす頸くびが、鮮やかに、狭霧さぎりの中に描えがかれたが、見る見る、色があせて、薄うすくなって、ぼんやりして、一いっ体たいに墨すみのようになって、やがて、幻まぼろしは手にも留とまらず。

放すして退ひると、別に堀際へいぎわに、犇ひしひし々と材木の筋すじが立つて並ぶ中に、朧おぼろおぼろ々々ともものこそあれ、学士は自分の影かげだろうと思つたが、月は無し、且かつ我が足は地つちに釘つづけになつてるのにも係からず、影法師かげぼうしは、薄うすくなり、濃こくなり、薄うすくなり、濃こくなり、ふらふら動くから我にもあらず、

「お柳、」

思わず又、

「お柳、」

といつてすたすたと十間けんばかりあとを追つた。

「待て。」

あでやかな顔は目前めさきに歴々ありありと見えて、ニツと笑う涼すずしい目の、

うるんだ露つゆも手に取るばかり、手を取ろうする、と何にもない。

掌たなそまわに障あさひつたのは寒い旭の光線あさひで、夜はほのぼのと明けたのであつ

た。

学士は昨夜、礫こいしかわ川なるその邸やしきで、確たしかに寢床ねどこに入つたことを

知つて、あとは恰も夢のよう。今を現うつつとも覚えぬ。唯見とみれば池の

ふちななる濡れ土を、五六寸離れて立つ霧の中に、唱名の声、  
 鈴の音、深川木場のお柳が姉の門に紛れはない。然も面を打つ一  
 脈の線香の香に、学士はハツと我に返つた。何も彼も忘れ  
 果てて、狂気の如く、その家を音信れて聞くと、お柳は丁ど爾  
 時……。あわれ、草木も、婦人も、靈魂に姿があるのか。





## 青空文庫情報

底本：「化鳥・三尺角」岩波文庫、岩波書店

2013（平成25）年11月15日第1刷発行

2015（平成27）年5月15日第2刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第四卷」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日

初出：「小天地 第一卷第八号」

1901（明治34）年6月10日

※表題は底本では、「木精《こだま》（三尺角拾遺）」となっています。

※初出時の表題は「木精」です。

入力：日根敏晶

校正：門田裕志

2016年6月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waizora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 木精（三尺角拾遺）

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>